

祝詞切麻呂

縁人の手向の御祈の麻呂



神よ奉りたまへ。此の祝詞の切
麻呂より祈りて、神の御前
に手向の幣を奉り、まはさ
しむる。此の祝詞の切麻呂
の御祈あり。

照妙和妙あり、此の御祈あり。

手向の御祈の御祈あり、此の御祈あり。

旁八面よりちりぼく、祝詞の切麻
の綴られし風の勢い、高天原より
ちりぼくし。旁八面よりちりぼく
んらいせん。高天原よりちりぼく
よ書きつめて、後へあぐさ。きん
祝詞の太祝詞の海に飛ぶきさき
と、神もつぎさぐさ、高天
原よりちりぼく、おほらりよ

りよ、はらちちりぼく、おほらりよ
さちちりぼく、神も、らりぼく、
愛で、此の切麻の色、
詞の文を織り、す料、ちりぼく、
の綴られし、ちりぼく、
の織り、機、の雲鳥の棲
ちりぼく、ちりぼく、織り
りよ。

明治廿二年一月三十日
大坂の〜の〜の〜
の〜か〜の〜物〜高見

例言

此の書ハ、延喜式ハ載せられたる諸の祝詞の中ハ、初學の人の心得ガてよすべき詞ともを、彼此こえりいせて註釋とさるなり。また、中臣審詞ハ、台記の別記ハ見えさるのみよて、式の祝詞の中ハ入りさらぬと、いと古くめとさる文よて、既ハ、祝詞正訓ハも、附録ハものしたれば、今の、式のこと一つようちませて、その詞とも註釋せり。さて、五十音よこりち、一言、二言とやうハ次第とるハ、探ね出せんよ、たよりよりれとてなり。また、註釋ハ、大抵、古事記傳ハ據り、祝詞考、大祓詞後釋、出雲神賀詞後釋、その外、諸書の説ともをまじへあけり。さるハ、いさよりも、私のさりとらさせじ

とてなり。たゞし、彼の中臣壽詞の如く、いまど、先達の註釋
なきたぐひの詞ともひ、すべなくて、高世がおろりなる考
をも出せり。まゝ、既に註釋ある詞も、いかにぞやおはゆ
るひ、まづ、その註釋をあけて、次、かつく、そのよをい
へる事もあり。さて、註釋ひ、ひねご、省略ぎてものじり。委
しくひ、別、祝詞新註といふ書をかきて、それよいへれ
なり。さて、まゝ、詞をあぐるよ、たごへ、天御舍ごあるたぐ
ひひ、正しくひ、美の部、四言の下、たゞ、御舍ご出さすべ
なり。然るを、阿の部、七言の下、天御舍ごあけさるひ、い
にぞやあるとさなれど、此の書ひ、かへすくも、さる、詞の
ごりごさも、まゝえ知らさらん初學の爲よごてものせし

なれば、なほ、天御舍ごあけさり。たゞし、たゞ、御舍ごて、美の
部、四言の下、出させるたぐひも、たま〜ひあるべけれ
ば、彼方此方みあそすべし。さて、まゝ、阿禮坐ごあるなども、
右の如くよて、坐ひ、別の詞なれば、除き、阿禮も、語格のまゝ
よ正しくひ、アルごあぐべきなれど、さてひ、なり〜よ、初
學の惑ふべきとさなれば、なほ阿禮坐ご出さし、凡て、かう
やうなる詞のたぐひひ、左あるも右りるも、たゞ、その文よ
見えさるまゝをあけさり。まゝ、その詞の註釋より外よ、な
にくれといへる事もあるひ、其の詞のつゞきよより、詞の
みの註釋よてひ、文義の心得がさるべきところ〜あ
るをりの事なり。それ、まゝ、祝詞を學びよまん人よ、いさよ

かよても、そのたよりよなれかよてのさよなん、さて、
 此の書、故ありて、すみやりにて、僅りよ、十七八日の間
 よものよつるなれば、もらよ事もありなんかよ。
 祝詞よもの名を、うるそよく舉げよらん、中々よ見
 にくき方もありて、今の略號を用ひよれば、次よ、其の
 例よもを示すなり。

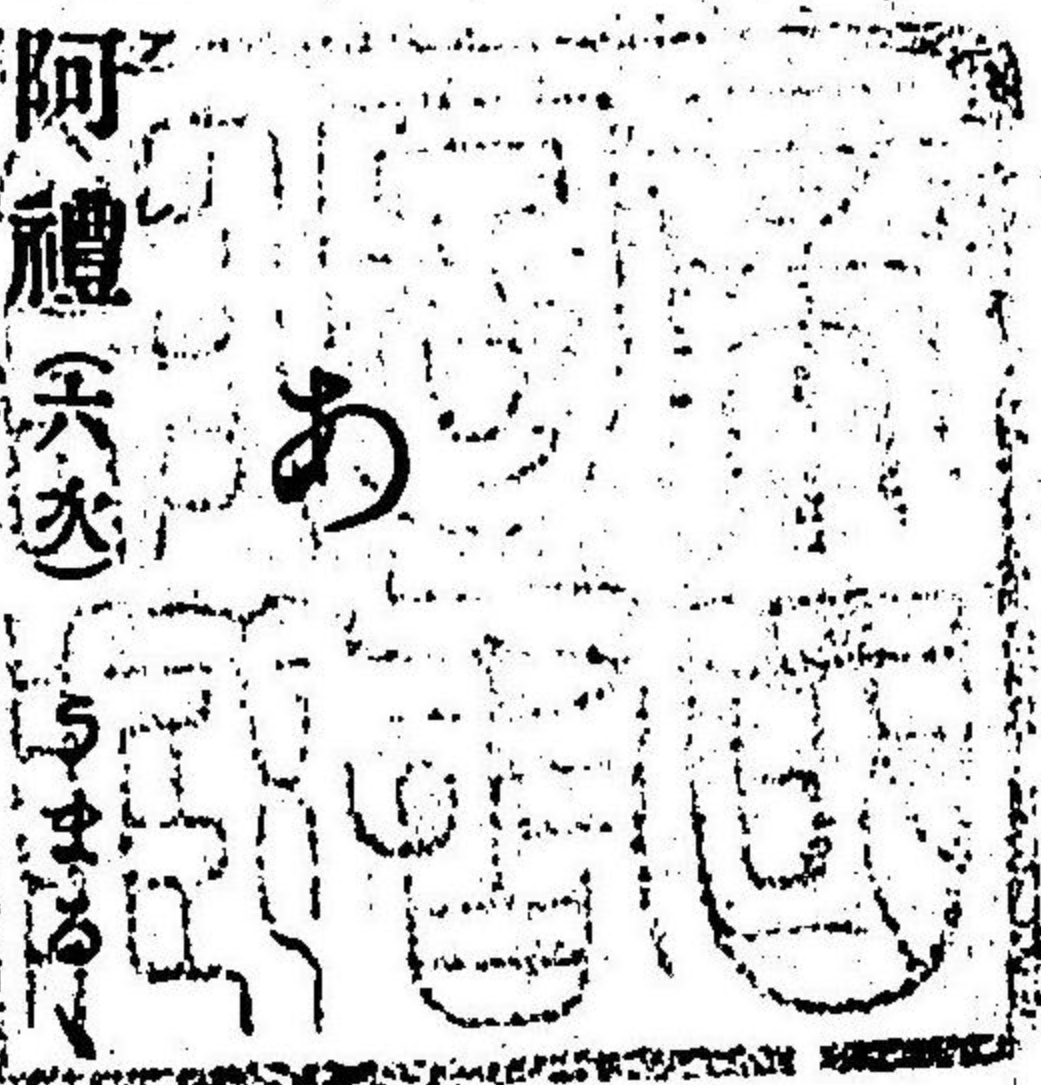
年……………祈年祭
 春……………春日祭
 廣……………廣瀬大忌祭
 風……………龍田風神祭
 平……………平野祭

久……………久度古開
 月次……………六月々次祭
 殿……………大殿祭
 門……………御門祭
 祓……………六月晦日大祓

嘗……………同神嘗祭
 齋……………奉入齋内親王時詞
 遷宮……………奉遷大神宮祝詞
 崇……………遷却崇神祭詞
 道……………道饗祭
 火……………火鎮祭
 大嘗……………大嘗祭
 魂……………鎮御魂齋戸祭
 伊……………伊勢大神宮
 豊……………豊受宮
 衣……………四月神衣祭

六次……………六月々次祭
 神嘗……………九月神嘗祭
 豊嘗……………豊受宮同祭
 使……………遣唐使時奉幣
 出……………出雲國造神賀詞
 中……………中臣壽詞

祝詞切幣



阿禮(天武)事なり現の義なり。

阿須波(年)神の名なり足場の義なり。

飛鳥(年)大和國高市郡の内にある地名なるを神社のます故に其地名をやがて神の名に申しなせるなり。

縣(年)上田といふ事にて水のつかぬ田といふ。鳥はもとよりの事なり。さて御縣といふは朝廷の御領の田鳥なり。後に此縣の字をあててかさしより縣といふべきはどの地

豊後 物集高世輯

をば皆アガタといふ事になりたり。今の郡といふは、即ち古への縣にあたり。

朝臣(中)吾兄臣の約言にて、またしみがめていふ稱なり。天武天皇の御代より朝臣と書きて、姓の戸と定められたり。

荒備(累)アラハ生(魚)球暴などの字の義にあたり。その中にアラビアラブルなどは、すべて、暴の字の義にあたり。

阿禮比(殿)荒備と同じ。ラとレと通音なり。

荒稻(殿)和稻荒稻とあり。和稻は米にて荒

稻は類ながらあるをいふ、その類の類をす
りさりたるを和稻とはいふなり。

荒妙 (年) 麻の布なり。
麓草 (田) 麓は假字にて生の義なり、草の遠
き野山などに生ひたるまゝにて、人の氣に
穢れずてあるものをいふなり。

相嘗 (中) 嘗は新稻を以て嘗するにて、新嘗
の約言なり、相嘗とは古へは田舎にて、神
にも献り、人にも嘗へ、自らも食ふ事なりし
故にいふなり、さて、それを朝廷にては、大嘗
ともいひしを、後世になりては、踐祚の時に
物せらるゝをのみ、大嘗といふ事になり、毎
年のをば、新嘗といひわくる事になりたり。

赤玉 (田) 字の如し、明の義にはあらざる事、
下の白玉にむかへたるにて知るべし。

畔放 (祓) 今はアセといふを古はアとのみ
後に、此地にて、人の犯せるをも、まかいふな
り、國津罪と見合はすべし。

天津水 (中) 天上の水をいふ、津は、天津罪
の津と同じくしての如し。

天津御食 (中) 天皇の御食にも、ものする
般は、天上より持ち下り給へるものなる故
に、天津とはいへるなり、津は、の如し、さて、
食の事は、朝御食、夕御食の下に註すべし。

天乃八井 (中) 八井は、彌井にて、水の彌、
にわく井なりといふ説われ、非なり、彌井
とては、井の敷の多きをいふ詞にこそなれ、
水の多く涌くよしには、聞くべからぬ、語例
なるをや、されども、さやうに、許多の井のわ
き出づべきにも、あらねば、この八は、美にて、
よき井の義なるべし、ヤを、エといふは、万葉
に、おそは、やも、汝をこそ、また、め、向つ、峰の、推

いひしなり、田の界なり、放は、毀つにて、界を
乱し、田に引く水を、其處にたゝへて、置かれ
ぬやうにするをいふなり。

明妙 (年) 色の鮮明なる絹をいふ、タへは、す
べて、絹布を呼ぶ名なり。

青水泡 (田) 青は、水の深き色をいふ、さて、
水は、ミとのみもいふ故に、ミノアツを約め
て、ミナツとはいふなり。

相作 (中) 大嘗祭の時の、黒酒、白酒をつくる
職の者なり、同職の者、酒波といふを助けて
物する故に、相作とはいふなり、酒波の事は
下にいでたり。

天翔 (田) 空をかけるなり、同じやうなれど、
空に翔るといふとは異なり。

天津罪 (祓) 須佐之男の命の、天にて犯し
給ひし罪をいふ、ざる故に、其の類の罪をば、

の故、夜提の、あひはたがは、じとある、故、夜提
は、小枝なるにて、知るべし、ざるは、もとより
通音なればなり。

荒振神 (祓) 邪神、妖魅の、屬をいふ。
顯事 (田) アラハニゴト、また、アラハゴトと
も訓れど、アラハリゴトとよむべし、幽事を、
カクリゴトとよむにむかへてなり、幽事は、
神事とも書きたれば、とて、カミゴトとのみ
よむべし、といふ説もあれど、此所の文に、現
事、顯事とあるにむかへて、幽事は、カクリゴ
ト、神事は、カミゴトとよむべき事を知るべ
し、さて、顯事は、天皇の領しめす此の世のよ
ろづの事、幽事は、大國主の神の領しめす幽
界のよろづの事をいふなり。

天津日嗣 (殿) 天津日の大御神の御任
をつぎ、く、に、うけ、傳へ、給ふ、よしの、御稱な

後に、此地にて、人の犯せるをも、まかいふな
り、國津罪と見合はすべし。

の故、夜提の、あひはたがは、じとある、故、夜提
は、小枝なるにて、知るべし、ざるは、もとより
通音なればなり。

り天皇の御位を申すなり。

天津次(世) 出雲國造の祖天穗日命より

はじめて世々の國造の次々に賀ぎ申す故

天津璽(殿) 天の璽といふに同じ天神の

御子といふ徴借の御實なり。

天之高市(鬼) 地の名なり天日の國の

中にある地の名なり。

天磐門(祓) 天日の國の神等の宮の御門

なり勢とは堅固なるをいふなり。

天能碓和(世) 酒を醸む器なりたい、ミカ

ども、ミカワともいふ。

天津菅麻(祓) 菅は假字清にて清麻な

り天津は美稱なり菅麻に天津といふよし

天若彦(鬼) 天國玉神の子なり諸神の中

に此の神のみを神とも命ともいひたらぬ

天乃血垂(殿) 血垂は假

陀流とありて庖厨の籠所の上の炊煙の發

騰る所をいふ炊煙のまげくたつは家のと

める故なるにより登陀流は富足の約言に

てトトナとは通音またリトルとも同じ通

音なる故にチマルともいふなり天は例の

美稱にてもあるべくまたその籠所の上の

炊煙のたつ所の名をアマといへる事體源

抄に見えられたればそれにもあるべし。

天津金木(祓) 天津は崇辭なり天之益

人の下に註すべし金木は假字にて細き木

を總て呼ぶ名なり。

青垣山(世) 山の垣の如く立ちめぐりた

るをいふ古歌などに多き言なり。

相宇豆乃比(天書) 乃比は奈比ともい

へりうべなひといふに同じ。

相麻自許利(門) まじなはるゝなり相

はかるくそはれる言なり。

相口會(門) うべなふをいふ會をアへど

よむ説はわろしアフとよむべし。

秋祭(廣) 七月の祭をいふ。

明御神(世) 天皇は今あきらかに世に座

す神なればかく申すなり。

明和幣(殿) 明は色の鮮明なるをいふ和

幣は和妙にて絹なり。のついでなり。

荒國(世) 國の荒ふるよしは上の文に見え

たり。ブルは其状をいふ言なり。

甘菜辛菜(年) 甘菜は青菜また蕪のた

ぐひ辛菜は蘿蔔野蕪などをいふ。

青海原(年) 此の訓もとはアヲウナハラ

とあり祝詞正訓にはアヲミハラとよみた

れど大野原をばオホヌノハラとよむにむ

かへてアヲミノハラとよむべきなり。

天之八重雲(祓) 彌重雲なり。

天御舍(鬼) 天は崇辭御在所の義なり。

天津宮事(祓) 天照大御神の天宮にて

の御作法を申せるなり。

天津御量(殿) 量は假字、議にて神議な

り天津とは天上にての事なればいへるな

り津ハ天津罪の條にいへり。

天乃玉櫛(中) 櫛は假字にて玉申なり。さ

てこの天は崇辭にはあらず實に天のなり。

天之益人(祓) 古事記に伊邪那美命、人

草を一日絞殺千頭と詔ひしに伊邪那岐命、

吾一日立千五百産屋と詔へりこれにより

て世人死ぬるよりも生るゝが多ければ益

人といふなり。さて、天之とはもと、天孫の降臨ありしはじめ、天より持來給へる物をいふをもとにて、後には、天の物にならひて、造れる物や、またる事やなどにいへるが廣くなりて、必ずしもまからぬ物にも事にも、たいはめていふ事となれるなり。この天之益人もそれなり。

天之磐座

(祝) 天は崇辭にはあらず、實の天之なり。書紀に、天磐座、此れを阿麻能以、籬矩羅といふとありて、クらは座をいふ古言、磐は、堅固の義なり。

荒祭宮

(衣) 天照大御神の宮なり。荒御魂を祭り奉りたる宮なり。

朝御食夕御食

(年) 朝夕の御饌といふ。食はもとウケともウカともいひて、豐字氣毘賣神、また宇迦之御魂神などの字氣字

天乃美賀秘冠

(出) 秘の字は氣の誤りなり。さる例もある事なり。さて、氣の下に、登とよみつくべし。御殿の事を、天の御蔭、日の御蔭と隱坐といふ。其の天の御蔭と木綿盤を頭に冠るといふ意なり。さるは、木綿盤を頭に着れば、日光をおはふ故なり。

天津奇護言

(殿) 天上の妙なる祝言なり。奇ひなる祝言なり。

預而仕奉

(卷) 大政を關り申すなり。百官の人々をすべていふなり。

荒鹽之鹽乃八百道

(祝) 下の八鹽道の條にいへり。

朝日能豐逆登

(年) 逆は借字、榮にて、日の昇るけしきを、はめていふなり。

朝日乃日向處

(風) いにしへは、日のさ

飛鳥乃神奈備

(出) 飛鳥は、大和國高市郡の地名なり。神奈備は、神の杜なり。モリの約め、ミにて、神乃美なるを、ノとナと通音、ヒとミと通音なる故に、神奈備とはいふなり。歌に、神奈備乃杜とよむは、地名となりて、後の事なり。思ひまよふべからず。

吾平奈見給

(比) 我を見給ふなり。天乃一上(中) 天日の國にある峰の名なり。天之高市の例に同じ。

天津高御座

(中) 天皇の御座なり。天津は、崇辭にて、高は、そのかまへをいふ。座の事は、天之磐座の下に註せり。

天能壁立極

(年) 天を遠く望めば、壁の如く四方に側立て見ゆるをいふ。

龍備疎備來物

(道) 黃泉醜女などの屬

赤丹穗爾聞食

(年) 赤土とも書けり。穗はその色のすぐれたる所をいふ。御面の赤くならせ給ふまで、聞召すとすなり。

天御蔭日御蔭

(年) 屋舎は、天と日とを覆ふための物なれば、かくいふなり。

天社國社

(年) 天神地祇の社といふ義なり。されど、後には、うちまかせて、神祇の御事を申すなり。

天能麻我都比登云神

(門) 禍津日神の事なり。天能は、軽く添へたるなり。

青雲能靄極

(年) 青雲とは、青き空をいふ。大空のはてをいふ。

邪意穢心

(殿) 邪は穢とする故に、キナシといふなり。されば、邪穢は同じ言なるを、重ねていへるなり。

天津祝詞乃太祝詞事(祝)

ゴトは宣津言なるべし宣説言といふ説も
われど説をトクといふは古言には見えぬ
はなり。さて天津祝詞とは天の神のよさし
給へる御言にて鎮火祭の詞のごとき即ち
それなるを後にはそれにならひて作れる
祝詞をもをもなべていふやうになれり。
天津次能神賀吉詞(世) 天津次は
六言の下にいへり神賀の吉詞は字のごと
し褒め稱へていふ辭なり。

伊豆(世)

さよき義なり。また威後(は)たけさ
義なり。ツツ清濁にて異なり。
齋比(年) ハヒの約ヒにてミに通ふ故に齋
は忌と同言なり。然るに、イハヒには齋の字

磐根(祝)

常にいふはた、勢の事なれど此
處は木の株章の片葉とならべたるは土中
に入りたる勢の根をいふなるべし。

汝(祝)

人を座し座すといふ。そのイマシを
やがて人をさしていふ稱にしたるなり。

氣吹戸(祝)

戸は處なり。此はかくいふ一
の處のあるにはあらず。罪穢を吹き放ち遣
るところの限りを廣くさしていへるなり。

生剥(祝)

生けながら剥くなり。イヤとよむ
はわろし。言には自他といふ事あるなり。

伊加志穂(年)

イカシは、嚴重茂などの
字をよめり。大きに實のれる穂をいふなり

齋戸(魂)

神祇官の齋院の事なり。戸は假字
なり。處をいふなり。

齋斧(祝)

忌みさよめたる斧なり。

祝の字などを書き、イミには、大概、忌の字を

書きて嫌ひ悪む事にのみいふやうになり
たれど、それも、諸の凶悪事、汚穢事などを避
けて、其の物、其の事をよからしめんとする
にてもはら、イハヒと同じ事なり。

忌部(年)

忌部の神を祭る種々の物を作り、
すべて穢をいみて、事をなす職の者なり。部
ハ群の約めメなるを、通音なる故に、べども
いふなり。諸氏あり。

生井(年)

井の神の御名なり。
伊穂理(祝) 俗言に、煙のイマルといふ類
にて、雲霧などをいふ。

石村(年)

神社の座すを以て、其の地名を、や
がて、神の御名に申しなせるなり。大和國十
市郡なり。石村を、イハレとよむは、村は、アレ
とよむを、石のハに、其のアの韻こもれる故

齋鉏(年)

きよめたる鉏なり。

彌乎知(世)

彌は字のごとし。乎知は、ヒ
めの方へ返るをいふ。此處は、若返る意なり。

言排(門)

排は、令退なり。退くるなり。

伊須々伎(祝)

驚き懼れ慄く状なり。立
ちはしり伊須々伎なといへり。

石隠(火)

陵墓は、石を以て構ふる故に、死ぬ
るを石隠といふ。こゝは、伊非冊命を、人の如
くにて、死に給へる様に申しなしたるなり。

茂梓(中)

大きなる梓なり。

茂御世(年)

盛りなる御世をいふ。なべて
は、イカシニヨとよむべく、手長御世といふ
言にむかふる時は、イカシノニヨとよむべ
し。然か訓むべき例なり。

伊須呂許比(祝)

スハロキの延言なり。

はしりさわぐ状をいふ。

伊豆能眞屋 (出) きよめたる屋なり。

齋許母利 (出) 不浄を忌みて籠るなり。

齋柱 (慶) 忌みきよめたる柱なり。忌斧といふも同じくして神事なればいへるなり。

供齋 (出) 祝言なり。供の字は此の續きに御神乃御寶献良久登奏白玉能云々とありて、さる神寶を献る、その意を以てかける也。

祭主 (中) マツリメシといふに同じ官職ならでもいふ語なり。

生御調 (出) 生きたる物を献るをいふ。御調は御續にて物をつきくに献るより出でたる言なり。

生魂 (年) 神の御名なり。

彌若叡 (出) 彌若くなるといふ言なり。

一速比 (火) 稜威疾なり。比はブリのついでたる言なり。

めにて其の状をいふ言なり。

生膚斷 (祝) 生膚は字の如し断は疵を付くるをいふ。切りはなつにはあらず。

伊豆能席 (出) きよめたる席なり。

氣吹放 (祝) 氣は息なり。

伊都閉黒益之 (出) 伊都は淨きなり。閉は埒にて物を煮る器の惣名なり。黒益之はくろむるなり。物を煮れば埒のすけて黒くなる故に、かくいひて物おほく煮る事に聞かせしなり。

伊加志夜久波叡 (春) 茂彌木菜なり。

生日能足日 (出) 生も足も稱許なり。

稻實公 (中) 大嘗祭のとき其の御祭に用ふる稻を掌る職の者なり。

齋玉作等 (火) 玉工等なり。齋は淨めて

齋内親王 (齋) 齋宮を申す。齋は崇め仕ふるにいふ語なり。

伊波比能返事 (出) 祭の復命なり。

伊豆都志伎事無久 (慶) 伊は發語。恙しき事なくといふ意なり。

伊都幣能緒結 (出) 伊都は淨きなり。幣はこゝのは木綿製にて緒結とはそれを頭に結び付くるをいふ。

伊夜高爾伊夜廣爾 (平) 伊夜は彌なり。彌々なり。王臣の官位彌高に、氏族彌廣にどの義なり。

生嶋能御巫 (年) 生嶋は地名なり。難波の地名なり。御巫は御神の子の義にて、其の神は神主などの神の如し。

五穀物 (風) 五種の田なり。稻、粟、小豆、麥、大豆をいふ。漢土にては、黍、稷、麻、豆、麥をいふ。

伊頭乃千別爾千別氏 (祝) 稜威の道分なり。稜威は勢のいかめしきをいふ。

氣吹戸主止云神 (祝) 息吹處大人の義なり。直日神の別名なり。

今木與利仕奉來流 (平) 此の神はヒメ奈良の今木といふ處にましける故に、かくいふなり。

ト部 (祝) 龜トに仕ふる者なり。伊豆壹岐對馬などの國々より召さるゝなり。

宇奈提 (出) 畝火山の西北に雲梯といふ村あり、其所をいふなるべし。

宇氣比 (風) 誓の字訓の字などよみて、此處は新に當りたれど、この言はもと假令は

神は神主などの神の如し。

五穀物 (風) 五種の田なり。稻、粟、小豆、麥、大豆をいふ。漢土にては、黍、稷、麻、豆、麥をいふ。

伊頭乃千別爾千別氏 (祝) 稜威の道分なり。稜威は勢のいかめしきをいふ。

氣吹戸主止云神 (祝) 息吹處大人の義なり。直日神の別名なり。

今木與利仕奉來流 (平) 此の神はヒメ奈良の今木といふ處にましける故に、かくいふなり。

ト部 (祝) 龜トに仕ふる者なり。伊豆壹岐對馬などの國々より召さるゝなり。

宇奈提 (出) 畝火山の西北に雲梯といふ村あり、其所をいふなるべし。

宇氣比 (風) 誓の字訓の字などよみて、此處は新に當りたれど、この言はもと假令は

神は神主などの神の如し。

五穀物 (風) 五種の田なり。稻、粟、小豆、麥、大豆をいふ。漢土にては、黍、稷、麻、豆、麥をいふ。

伊頭乃千別爾千別氏 (祝) 稜威の道分なり。稜威は勢のいかめしきをいふ。

氣吹戸主止云神 (祝) 息吹處大人の義なり。直日神の別名なり。

今木與利仕奉來流 (平) 此の神はヒメ奈良の今木といふ處にましける故に、かくいふなり。

ト部 (祝) 龜トに仕ふる者なり。伊豆壹岐對馬などの國々より召さるゝなり。

宇奈提 (出) 畝火山の西北に雲梯といふ村あり、其所をいふなるべし。

宇氣比 (風) 誓の字訓の字などよみて、此處は新に當りたれど、この言はもと假令は

神は神主などの神の如し。

五穀物 (風) 五種の田なり。稻、粟、小豆、麥、大豆をいふ。漢土にては、黍、稷、麻、豆、麥をいふ。

伊頭乃千別爾千別氏 (祝) 稜威の道分なり。稜威は勢のいかめしきをいふ。

氣吹戸主止云神 (祝) 息吹處大人の義なり。直日神の別名なり。

此の事成るべくば其の兆にかゝる事われ
といふ祈をするをいふ言なり。されば誓祈
の字は當らぬ事あるなり。

飲火(年) 大和の高市郡の山なり神社の座

す故にやがて神の名にも申しなせるなり。

宇都志國(中) 此の人の世界をいふ。

甘水(應) ウマンは味ひのみにはいはず何

にてもよきをいふ言なり。

宇都御子(應) 宇都は高くいつくしき

をいふ言なり。されば美稱なり。

上津國(火) 夜見を下津國といふに對へ

てこの地をいへるなり。

内人(衣) 名義は神宮の内人の意なり。大内

人小内人などいへり。常は神社の宿直な

どをする者なり。

ト止母(風) ウラは意なり神の御意を問ひ

疎備荒備來武(門) 荒備疎備來物とあ

るに同じ上に其の詞はいでたり。

集侍(中) ウコは候なり。ハヘリは字の如く

なれど言の義は備備在なり。

受給波里申仁(中) 受け授り奉りになり。

宇事物頸根衝拔(年) 宇は轉なり。事

物は狀のにて轉の如くといふ意の枕詞な

り頸根衝拔は拜む狀にてそれが轉の潜く

に似たる故にいふなり。

上津石根踏堅米(田) 地の處を下

津石根といへるにひかへたり踏堅米は柱

の根を堅くかたむるをいふなり。

ト事爾出牟神方御心(風) トは神

の意を問ふわさなる故に兆にあらはるゝ

が即ち神の意の出でたるなり。

馬爪至留限(年) 陸地のつく極みを

奉るわざなる故にウラトフともいへり。さ
てウラへはト命令の約なり兆にあらはる
ゝをウラアフといふ。

現事(世) 顯事の下にいへり此の顯界のよ

ろづの事をいふなり。

集侍(年) ウコは候なりナハレルはその狀

をいふ辭にて義は字のどし。

受賜(年) 幣を受け授かりてなり。

疎夫留物(年) 邪神等なり疎夫留は彼

れより我れをなり。夫留はフを延べたるに

てそのフはまたムにかよふなり。

宇豆能幣帛(年) 宇豆は多く美きなり。

宇須波伎坐世(皇) 宇須は大人波伎

はその狀をいふ辭にて此處はその地に大

人として坐せにて主長として領して坐せ

といふ事なり。

いふ行かるゝ處までといふ意なり。

お

忍坂(年) 大和國城上郡の地名なるを神社

の坐す故にやがて神名にも申しなせるな

り。かゝる例は上にもあり。

大嘗會(中) 相嘗の下にいへり。

大津邊(祓) 津は船の寄り居る所なり。

大八洲(殿) 皇國なり二神の生み給へる

は八洲のみならぬと次第に生み廻りて一

周したる所を以て國號とまたるなり。

落多支都(祓) 落ち沸るなり。ギルは

水のわさかへる狀なり。ルとツと通音なり。

大祓(祓) 大とは此の禊祓は天下に廣く行

はせらるゝ故にいふなり。

大野原(年) 畑をも野といふなり。

意志波留志天(田) 押しはるかしてな

り曇りを拭ひてなり。

置高成(平) 置足はすに同じ。

公民(廣) 大御實の義なり。

大幣帛(春) 幣帛の下にいふ。

大八衢(運) 八は彌なり衢の敷の多きを

いふ大ハ、覆めていふ辭なり。

大中臣(祓) 中執臣の約言大は美稱なり。

皇神と天皇との御中を執るなり。

奥津御年(年) 御は稱辭年は稻なり年

は田寄の約めにて田の物を天皇に神の寄

せ給ふよしなり奥津は五穀の中に稻は最

末に熟する故にいふといへりされど奥と

は古へ凡て稱辭にいへればそれにてあ

るべし津は例の助辭なり。

己乖々(履) 人々己れくの向きくに

て一致ならぬをいふなり。

大峽小峽(履) 峽は山と山との間をい

ふ谷のかたそばの處なり。

所思食久(火) 食久はメスなりサクの約

めスなりさればオモホシメスなり。

大海原(年) 海は渡るものなればワラヒ

いふといへり。

大御巫(年) 大は美稱なり御巫の事は上

の生島乃御巫の下にいへり。

御床都比(履) 都比は糴合の器なりと

もいひまた一説には都比は沖津風などの津

比は邊にて御床の邊なりなともいへり御

はたれミとよむべし。

墮事無(年) 漏るゝ事なくなり。

奥津藻菜邊津藻菜(年) 沖と邊と

に生ふる藻菜なり海布ともいふなり。

思志行波須(風) 思はし食すなり行の字

の下に波の字あれば此處の行はかくよむ

べければすべてはメスと訓ひなり此處も

波の字は誤りて入りたるにてオモホシメ

スにはあらぬか然か訓ひ方よくきこゆ。

大御和乃神奈備(田) 大は稱辭なり。

御和は三輪にて大和の地名なり神奈備は

飛鳥乃神奈備の下にいへり。

己母犯罪(祓) 己が母に婦くるなり。

己子犯罪(祓) 己が子に婦くるなり。

大倭日高見國(祓) 日高見國の下に

いへりひの都を見るべし。

大宮新仕奉(遷宮) 仕は造るなり造る

も仕へ奉るに同じ事なればかくいふなり。

カ

川菜(火) 河者なり河者はよく水を含む物

とぞまた水者ともかけり

持(風) 機(機)の道具なり積みたる篋の糸引

さかくる物の名なり

神主(年) 神を祭る人の長なりあるが中の

大人といふ義なり。

神嘗(神嘗) カムニへとも訓ひべし嘗の字

は漢土にて秋の祭を嘗といふ故に借りて

かける也此の字によりてナメとよむには

あらずナメはニへの轉音なり神に嘗する也

葛木(年) 大和の地名なり神社の坐します

故にやがて神の名にも申しなせるなり。

加牟加比(年) 食向なり神の御膳に着

き給ふをいふなり。

可々吞(祓) 可々は飲む音なり。

加夫呂伎(田) 神瀝伎なりフとよむとは

通書なるゆゑにいふなり。

神魂(年) 神産靈の神を申すなり。

神奈我良(鬼) 神のまゝになり。

神主部(六次) 部は徒なり。神宜大内人等

をさしていへるなり。

懸税(豊登) 新稻の類を竹に着けて献るを

いふ。チカラは民ごもの用ひたる力の義なり。

薪採(中) 大嘗祭の時の職の者なり。

門閉(年) 古へは傍らに置きたる戸を取り

て立てもし、塞ぎもしける故に、カタといふ

語をいひならへるなり。

神攘(鬼) 神職などいふ如く、神はたゞ軽く

そへていふのみなり。

隠坐(年) 御舎の蔭に坐すといふ義なり。

草乃噪鼓(鬼) 何にても、屋を驚く草を、カ

ヤといふ草も、それに用ふる故に、カタとい

ひ草の用は、屋を驚くが主なる故に、草の字

をもやがて、カタといふやうになれるなり。

噪鼓はその乱れを、つけたるをいふ。

門開(年) 古は、道戸はなかりし故に、アクル

とをささく、いはざりしなり。

神留坐(年) ッマリは、トマリに同じ。

神賀吉詞(世) 字の如し、神は、軽く添へ

たる辞にて、神集神職の神と同じ。

聖誓(年) 常誓に聖誓にとも

云へり、カヨイハトコイハの約言轉音なり。

ハの下に、いづれも、ノ如くといふ言をそへ

て聞けば、よく聞ゆるなり。

神戸人等(月次) 神戸は神社に属ける

民戸をも、ひろくいふ稱なり。

桂麻久毛畏伎(世) 詞に掛けんも畏きな

り、麻久の約めなり。

神奈我良鎮坐(世) 神奈我良は、神

の、ニなり、良の下、モを訓みつけたるは

上文に、神奈我良毛とある故なり、鎮坐は、

(志の部にいへるを見るべし。

神漏伎命神漏彌命(年) 上の命の

字は、後人の狡意に加へたるなり、除くべし。

其の故は、命はその下の、以についで、御言

なればなり、さて、神漏は、神生祖の約りにて、

アトヤとを省けるなり、さて、ハ男、ミは女

をいふ事、伊弉諾伊弉册命のごとし。

よ

樹立(世) 大嘗祭の祠に、木根立知とあるに

よりて、此所をも、カ訓むなり、株をいふ。

聞直(志) 聞さなだむるなり。

聞食(年) 聞くは、もとよりにて、知る事も、食

神直備大直備(世) 神の名なり、さ

て、此の神、曲事を直し給ふ故に、此の神の如

くにどの義にて、かくいへるなり。

神議議賜(世) 神集神留などの如く、神

は、軽くそへたる詞にて、たゞ職る事なり。

神集集賜(世) 神職の下にいへるが

如く、神は添へたる詞にて、たゞ集へるなり。

神和和給(鬼) 神は、神集神職の如く、た

ゞ軽く添へたる詞なり、ハシは和くする

なり。

神問志彌問志給(世) 神は、神職の神の

如く、たゞ軽く添へたる詞なり、さて問をト

ハシといへるは、併めていへるなり。

葛木乃鴨能神奈備(世) 葛木、鴨は、大

和の地名、神名備は、飛鳥乃神奈備の下にい

へり、あの部を見るべし。

ふ事もかくいふなり。
清麻波利仁奉仕利(中) 麻波利の約
めにて清めといはんが如し奉仕利は
(二)の都の下にいふべし。

國中(祓) クニウチの約めなり。
久那斗(道) 神の名なり莫來處の義なり。
位(春) 座居なり座は高さ義なり。

屎戸(祓) 尿をば、ヒリとも、ヘリともいふ屎
ヘリといふ事なり大嘗の殿を穢したるを
罪としたるなり。

種々(年) さまゝなり草をクサといふも
種々の物なるゆゑなり。
串刺(祓) 田に串を多く隠してさして下り
立ちがたからしむるなり。

それとは別なり、神事にのみ預るものとな
れりしは、遙かに後世の事なり。
自陸往道(年) 陸は國處の義なり、書紀
崇峻巻に、北陸をクニガノミチと訓めり又
クヌガともいへり、クガはクヌガの約めなり。

國能退立限(年) 退立は遠放立なり、遠
くある國の限りなり。
國作之大神(世) 大國主の神なり、作之
は作り給ひしなり。

黒木白木乃大御酒(中) 木は借字、
黒酒白酒なり、大嘗祭の時に用ふる物なり。
山にて、樂灰を焼き、それを和して造るなり。

畜仆志(祓) ケモノは、飼物の約言轉音な
り、クツシは、令曉にて殺すをいふ、古へは、人

國翔(世) 國とは、天に對へて云へるのみに
國の空を翔るをいふなり、八重雲乎押別
氏とあるにて知るべし。

國津罪(祓) 天津罪にむかへて、此の地に
ての罪をいふなり。
國體見爾(世) 字の如し、但し此處は、事
の有様を見になり、有様の事をも、カマ、また
カコチなどもいふなり。

草之垣葉(祓) 片葉とも、破葉とも書き
たり、欠葉の義なりとぞ。

欠度古開(久) 欠度は大和の平群の郡
なり、古開はさだかならず。

國乃八十國(火) 八は彌にて、多くの國
をいふ、八の數にかぎりてにはあらず。
國造(世) 國の御臣の義なり、古は國々にあ
りて、其の地々を治めし者なり、郡領に似て、

を怨みては、其の飼へる牛馬などを忽ちに
斃れしむる術などありて、せし事をいふな
るべし、是れ疊物と同じ様なる罪なり。

毛乃和物(風) 和は柔かなるなり、鳥の類
をいふ、廣瀬の祭詞に、和支とあるはわろし。

毛乃荒物(風) 獸の類なり、廣瀬の祭詞に、
荒支とあるはわろし。

畜犯罪(祓) 牛馬などに婚けし罪なり。

胡久美(祓) アマン、ともいふ、瘧なり、附
贅懸疣などの類、穢きを以て罪とするなり。
許々太久(祓) 許多をいふなり。

粉走(中) 大嘗祭の、白酒黒酒を醸るに預る
者の名なり、名義未詳、但し造酒司式に、篩灰
篩酒と見えれば、それよりつさし名にや

わらん灰は右の酒にあはするなり。

語問志 (被) 物いひしなり。いしへは物

いふをコトトフといへり。

語止氏 (被) ヤメハ令止なり。言を止めし

めてなり。物いふ事を止めてなり。

事始氏 (道) 皇御孫命の此の地を去りし

めすに至るまでの様々の事をあし籠めて

かくいへるなり。されど語足らず。いかにぞ

やあるなり。脱字などのあるにはあらぬか。

媚鎮天 (出) 稜威を以てせず。恭嚴を以て

なごめ順へしむるをいふ。

言直志和志 (慶) 言の字、コトと訓みたれ

ど。さては言の直きよしになりて、聞えず。い

ヒどか、ノリどか訓むべきなり。

心荒比曾波 (火) 曾といふこと聞えず。留

ど書ける本もあれば、必ず誤字などなるべ

し。されど此所は、セハといふべき所なれば、

セハといふは通ふゆゑに、セハを古言に、ソハ

といひしにもやあらん。然らば波の字は、濁

りて訓むべきところなり。

言寄奉賜比 (慶) ヨサシは寄せを延べ

たる崇辭なり。さて寄と賜とは、神傳企神香

美命に著き奉は、皇御孫命に著く崇辭なり。

賜の崇辭此所に、斯くいふは、後世の格にて、

古文には例なき事なり。

乞賜比能任爾 (卷) コハシは、コヒを延べ

たる崇辭なり。乞ひ給ふまゝになり。

子與母犯罪 (被) 己が奸せる女子の母

をもまた奸すをいふ。

七

榮井 (年) 御井の神の名なり。

佐夜伎 (慶) 物の鳴る音なり。さやめくなり。

酒波 (中) 大嘗祭の白酒黒酒をつくる職の

者の名なり。名義未詳。但し、酒乃美にて、後世

に諸賢などいふに同じく、酒の本を掌る義

にはあらぬにや。なほ能く考ふべし。

酒造兒 (中) 大嘗祭の黒酒白酒を醸る職

の者の名なり。儀式に委し。さて酒造兒とは

書きたれど、造とつとのみは、零くべきなら

ねば、つは、天津風などの類の助辭にて、たゞ

酒兒の義なるべし。

幸閉 (平) 幸ひあらしめといふ心なり。

狭國 (年) 狭き國なり。國を濁りて、グニとい

ふは非なり。濁るは狭きのきを零きて、サグ

ニといふとき事なり。

塞坐 (年) サヤリは障りと同じ。

岐國 (年) サガシキは坂しきなり。されば、カ

は清みていふべし。古事記には濁りたれど、

他の書には、清音の字を書けり。シキは悲し

きなどのシキに同じ。

棹柁不干 (年) 船の間も無く通ふをいふ。

如五月蠅水沸 (出) 水は借字にて、

皆なり。如は、ナスと訓むなり。邪神の群がり

たかるゝをいへる状なり。

佐須良比失 (被) 往方も知られ

ずしなして失はむとなり。

狭久那多利爾下賜水 (慶) 狭は眞

にて、眞下垂に下し給ふ水をいふなり。ズト

ナとは通音なり。

志太米 (出) 下見えなり。ミエの約め。な

り。物事の然るならんとする下兆の、かねて

見ゆるをいふなり。

白鵠(田) 鳥の名なり。白く大きな水鳥なり。
白人(祓) 和名抄に、白髪は、人面及身頸皮肉、色變白云々者也。之良波木とある物の類なり。世に、白子といふ物の類なり。

志貴鳥(風) 崇神天皇の大和國磯城瑞籬宮をいふ。鳥とはすべて、周廻に、界限ありて、一區なる域をいふ言なり。

頻蒔(祓) 物の種子を、一度蒔きたるうへに、またまきくするなり。然れば、その種子生出かたて、また生出ても、物にならぬなり。

志都宮(出) 神を鎮め奉る宮なり。
知食(年) 知りを、シロシといふは、崇めてなり。食は借字、メヌは見すにて、見給ふをいふ。

下津國(火) 夜見國をいふ。
科戸之風(祓) 科戸は、風神の名なる故

鹽乃八百會(祓) 八は彌にて、方々の潮道より流れ来る潮の、一つ所に集り會ひて、海底へ巻き没る所をいふなり。

汁仁毛實(仁毛) 汁は酒なり、實は類なり。
汁仁母類(仁母) 汁は酒なり、類は稻の穂なり。穂を切り、葉を去り、竹にかけて奉るなり。

白雲乃向伏限(月次) 遙かなる所は、雲のかりて見ゆるをもて、向伏といふなり。遠き限りをいふ。

鹽沫能留限(年) 潮の満ちゆく時ながる、沫の至りといまる限りとの事にて、海の廣くはてをいふ。

下津石根踏凝之(出) 下津石根は、柱の下をいふ。柱の根をいふなり。

倭文能大御心毛多親爾(出) 倭文

に、風の事をまかくいふなり。

繁木本(祓) 木は借字、たいまげききのなり。
鎮平天(出) 平の字は、義を以て書けるに、令向なり。扱は、背向なる、その反にて、此方に令向は、まつろはしむるなり。

下津綱根(慶) 上代の殿造りは、すべて上下縦横に、綱を以て結び固めし物にて、下津は、津は助辞にて、たい下なり。其の柱の根を結ぶ綱なり。根は、ナヒの約めニなるを、ネに轉して、いへるなり。

死膚斷(祓) 斷は、膚に、疵つくるをいふ。積る、を以て罪とせるなり。

鎮坐世(累) たい坐といふとは、異なり。其處より外へ遷り往く事なきをいふなり。

鳥能八十嶋(火) 八は彌なり。多くの島なり。八の數に限りてには、あらず。

は、古へのよき布にて、筋を織りたる物なり。シツは、即ち、スチなり。今いふ鳥織なり。さて此は、大御心も、倭文の筋の鮮かに見ゆる如く、儘かに坐ませといふなり。儘かは、ナシとのみもいへり。また、多は、和の誤りにて、ナゴヤにもあるべし。然らば、大御心も、平和にの義なり。倭文の柔らかなるに、たどふるなり。

白馬白猪白鷄(年) 此の物等を献るゆゑは、古語拾遺に見えたり。さて、案ふに、此は、シロウマ、シロウサ、シロカケ、と訓まんぞよろしかるべき。さるは、古事記に、赤猪をアカ

白雲能墜坐向伏限(年) 白雲の向

伏限といふに同じ。

汁爾母類爾母稱辭竟奉奉(年) 神に献る物は、すべて、稱辭して、たてまつる故に、

二二三

稱辭竟奉るといへば、すなはち献る事になるなり。然れば、此所は、汗にしても類にして、も献らむとの事なり。

白御馬能前足爪後足爪踏立事波(出) 白御馬は、献り物なるを、やがて踏

み立つる云々の枕詞につかへるなり。何となくいへるには、あらず。

す

主基(中) 大嘗祭に仕奉る二國を由基主基

といふ。由基は齋國の約め、主基は次なり。由基に次ぐ義なり。ツ。通音なり。

宿禰(殿) 少兄の約めなり。姓の尸となりし

は、天武天皇の御宇よりの事なり。

皇神(年) 皇統の神は、さならなり。然らぬも、あ

がめては、かく申すなり。

須々伎振(出) 濞ぎ振る也。濞ぐ状をいふ。

皇睦(年) 睦は、親みていふ辭なり。

天皇我朝廷(卷) ミカドは、御門の義に

て、やがて、大宮の事になるなり。

皇神能敷坐島(年) 敷坐は、領しめすな

り。島とは、國の事なり。

須々伎振遠止美乃水(出) 須々伎

振は、上に註せり。遠止美は、淀みなり。また、美乃の美を、上下に誤れるにて、美水にて、あ

るべし。然る時は、遠止は、小門にて、河門なり。

天皇我御命爾坐世(卷) 坐世は、借字、

令隨なり。隨ひてなり。

皇神能敷坐下津磐根(年) 皇神の

えろしめす大地の底の岩根なり。

住吉爾稱辭竟奉留皇神等(使)

稱辭云々は、此所にては、齋き奉るといふに

同じ齋き奉れば、稱辭申すゆゑなり。

せ

瀬織津比咩止云神(被織は、下りな

り。身瀬に、瀬に降りかづく意の御名なり。

瀬津日神の別名なり。

ろ

曾布(年) 大和國の郡の名なり。神社の坐す

故に、其の地名をやがて、神名に申しなせる

なり。上にも例あり。

た

底津石根(年) 地底の石根なり。

等(年) ヌナは、崇めていふ時の辭なり。賤し

ていふ時は、イモといふ。

高天(出) 高天の原なり。

高市(年) 大和國の郡の名なり。神社の坐す

故に、やがて、神名にも申しなせるなり。

稱(出) 水を湛ふると同言にて、満ち足りた

る義より轉りて、説る事になりたるなり。

櫛(風) 糸を繰る意なり。線柱とも書けり。

健備(果) 備は、フリなり。其の状をいふ辭なり。

多親爾(出) 體かになり。古言には、かくもい

へり。倭文、大御心も、多親爾の所みるべし。

手肱(年) ナは、ノなり。田邊などのナのことし。

足良志御世(殿) 事も物も足りといふのへ

る世をいふ。足御世ともいへり。

高天原(年) 空をいひ、また、日をもいふ。

手長御世(年) 手は、發語なり。遠きを、

トホシといふ類にて、長久なる御世をいふ。手長乃御壽などいへり。

足幣帛(卷) 足は多きを稱へていふなり。
高山之末(祓) 末は峰をいふ麓をば本

奉上天(中) 奉は天つ神の御許に参らせ

劍佩伴男(祓) 後世の六衛府のたぐひ

高津神乃災(祓) 雷また天狗などをいふ

高津鳥災(祓) たゞ鳥の事なり高とは

空をいふ災とは大殿祭の詞に天乃血垂飛

鳥乃禰無久とある血垂は人家の竈の上の

炊煙をいだし所なるを其の上を飛び渡る

もろくの鳥の毒ある糞または別に毒物

などを昨ひ來て竈の上におとし其の毒に

わたるたぐひの事をいふなり。

手櫛挂伴男(祓) 櫛部をいふといへり。

稱辭竟奉(年) 稱は三言の下に註せる

がごとし中臣書詞には稱辭定奉留ともい

へり同じ事なり。

手肱水沫畫垂(年) 畫垂は肱に沫

のつきてはかちくするをいふ。

谷蟻能狹度極(年) 谷蟻はヒヤカヘル

千木高知(年) 千木は氷木ともいへり。
肱木の轉音にて上代の家造りに屋の左右

のはしにありて其の本は前後の簷よりの

ばせ棟にて往きあふを組みちがへ其の末

を長く上へいだししたる物にてその高く出

でたる所を千木といふなりさる故に高

知ともいふなり知は領なるべし。

千座置座(祓) 置座は祓物を取り集め

て置く蓋なり千座は其の蓋の多きをいふ。

都祁(年) 大和國の山邊の郡の地名なり神社

の坐す故にやがて神名に申しなせるなり。

良氣久安(門) 續紀の詔詞に此

の詞をばすべてコヒラケクヤスケクと訓

めりひとわたり思へば然か訓むべきが如

く安良の良はあまりて聞ゆれどもヤスケ

クとては語調よろしからぬうへに此所に

かく見えはかにも今一つ二つかく書ける

も見えたればすべてヤスケケクと訓むべ

し應神天皇の御歌に波都邇波波陀阿可良

氣美とあるアカラケキと同格の言なり。

手長乃御壽(六次) 手長御世の下に註

せりそこを見るべし。

葛目(慶) 葛は綱なりいにしへは葛を以て

せし故に葛と書けるなり目は引結弊留と

ある其のむすび目なり。

津長井(年) 御井の神の名なり。
罪事(被) 罪の字は悪行一つに當てたるに

てツミといふ言のすべての意にはあらず。
ツミとはツミの約めにてすべてわろき
事のあるをいふされば悪行はさらなり病
また諸の禍穢き事醜き事など其の餘も人
のわろしと嫌ふ類の事はみなツミなり。

凡物(裏) 物はモノと訓むべし。シロとよま
ん事いかいなり。さて凡物は献り物といは
んが如し献り物は凡にのせて献る故なり。

罪出(武) 隠れたる罪の見はれんと
り。そは此の大赦に探り求むる故なり。

仕奉(年) ツカハは、被使の約めなり。さて此
の言廣く何事のうへにも涉りてたとへば
御殿を造り調貢を献る類もみな事ふるわ
ざなれば御殿仕奉調貢仕奉るといへり。

照志明良志御坐(中) 明良志といふ
まじき言なり。良は誤りにはあらず。

と

刀禰(度) 貴賤ともに官職ある人をいふ。伴
之部のモを省きノを約めていへるなり。

嫁繼(火) トは所にて夫婦合宿る所をいふ。
ツギは就にて其の所に就くをいふなり。

を濁るは黄牛などの例なり。

十市(年) 大和國の郡の名なり。神社の坐す

故にやがて神名に申しなせるなり。

遠御食(年) 御命長く食し給はん御食と

いふ事なり。稱へていふ辞なり。

件男(被) 部の長の略なり。

歳眞尼久(風) 眞尼久はおほくなり。多

作食(留) (六次) 食は、養を以て書ける字な
り。被賜の約言轉音なり。

遣時(出) 此の詞ツカハシタマヒントキと
いふべきが如くなれど、必ずさはいはぬ例
なり。もと使ふのつを延べたるにて、それ、や
がて崇めたる言なればなり。

罪止(云) 布罪(被) 罪といふべき限りの罪
はといふ心なり。すべての罪なり。

次乃隨(爾) (出) 次第のまゝになり。

作作物(風) 作る限りの物といふ心なり。

て

照妙(年) 明妙に同じく色の鮮明なるをい
ふ。ツカハは、絹布の物名なり。

曜和幣(被) 曜は、色を云ふ。和幣は和妙なり。
手蹟足蹟(被) 手は、取りあやまち。足は、

豊葦原(被) 豊は稱辭なり。葦を殖えて堅
めたる國なる故にいふなり。

戸牖乃錯(比) (被) 錯比は、それ合ふ所をいふ
飛鳥乃禍(被) 高津鳥災の下に註せり。

豊明仁明御坐(中) 御酒をゆして、御顔
のあからび坐すをやがて、御宴の名として、
豊の明といふなり。豊は稱へ辞なり。明御
坐は御顔を申すなり。

な

長御食(年) 御壽長く聞こし食さん御饌
といふ心なり。稱へていふ辞なり。

奈妹乃命(火) 奈は汝なり。汝は名の義に
て、もとは稱へ辞なり。

中取持(被) 神と君との中を取り持つなり。

り。上に茂林といへるは枕詞なり。

長道無間久立都々氣(年) 荷前の

馬を引立立て續けなり。されば立の字、マナと訓めるはひがことなり。マナと訓までは、語脈のたがふ事なり。

に

和稻(唐) 荒稻の下にいへり。

和妙(年) 絹なり。

和魂(唐) ニギハヤヒなごやかなるなり。

荷緒縛堅(年) 荷向の箇の緒をいへる也。

ね

禰宜(衣) 願の義なり。神主の下内人物忌な

根國底國(道) 黄泉をいふ。

攘平(氣武) (祟) 平氣武は鏡平天の下に註

せり。そこを見るべし。

波府虫能禍(殿) 上代の家は、かりそめ

の構へなりし故にもろくの虫の害の多かりしをいふなり。

服織麻績乃人等(衣) ハトリは機織

の約め、ヲミは苧績の器なり。

母與子犯罪(祓) 己れが妻たる女の前に、

他人に嫁して生れたる女子を犯すをいふ。

速開都比咩止云神(祓) 開の約め

イにて、伊豆能賣の神の事なりとぞ。

鱧能廣物鱧能狹物(年) ハハはヒレ

なり。廣狹は、大小の魚をいふなり。

ひ

日眞名子(田) 眞名子は愛子なり。日は

の

宣(年) 此の言宣の字、爾の字を當てて書く

故に、上より下にいふことと、のみ思ふは誤りなり。下より上にいふも、ノルといふなり

法別(氣氏) (祓) いひ分けてなり。

宣志久(殿) 志久は助辞なり。

は

祝部(年) 神主禰宜等に從ひて、事を執る者

なり。名義諸説あれど、みな、いかにぞやあり。

長谷(年) 大和國の城上の郡の地名なり。神社

の坐す故に、やがて、神名に申しなせるなり。

婆比支(年) 神の名なり。

灰焼(中) 大嘗祭の黒酒白酒にあはする灰を

焼く者をいふ。黒木白木云々の條みるべし。

崇めていふ辞なり。

樋放(祓) 溝や池やに構へたる樋を用なき

時に放ち、その貯へたる水を漏らして、田に

溢れしめ、且つ用を欠かしむるなり。

短山之末(祓) 短山は、ミツカヤマとも

訓むべし。また、低に訓まば、ヒクヤマとぞい

ふべき。ヒキ山とはいふべからず。さて、末は

峯をいふなり。高山之末の條みるべし。

日高見國(祓) 山遠く打ちはれて、平ら

かに廣き地をいふ。さる地は、日の高く見ゆ

る物なればなり。大和國の中央は、さる地な

る故に、大倭云々といへるなり。

廣瀬能川合(祓) 初瀬河の末と、佐保川

の流れ合ふ所なる故に、川合とはいへるなり。カハヒは、カハアヒの約されるなり。

日隱處

(風) 日影るにて、日のさす所をいふ。記傳には、隱の字によりて、陰になる所なりといへれど、さては、日のさす所をよしとせし、いにしへの意にかなはず、影といふ言を、かく活用したるは、カケロフなど、その証なり。されば、ヒカケルと訓むべきなり。

比禮挂件男

(禮) 領巾は、女の頂に掛くる飾りの服にて、御膳に仕へまつる采女どもをいふなり。

ふ

船居

(使) 船津なり。港なり。

太多須支

(年) 太は稱辭なり。多須支は手櫛なり。櫛は、字鏡に、東小兒背帶須支とあり。これより轉りて、袖をかゝぐる帶をも、スキといふやうになれるなるべし。手より

申は、献り物を着けたるなれば、その大きなよしをいへる文なり。今用ふるは、小枝なれど、いにしへは、さもあらざりけん。

舟艦能至留極

(年) 海路の續く極をいふ。海のかぎりをいふなり。

振立流事波耳能彌高爾

(耳) 耳乎振立流事波と聞くべし。そは、上文に見えたる馬の耳の如くといふ心なり。

へ

船解放艦解放

(禮) 解は、綱を解く

は

堀堅多留柱

(殿) 上代は、柱を、地に掘り立てし故にかくいふなり。

如火登光神

(田) 火登は、登の内にて、燒

掛くる物なればなり。

履佐久美

(年) 踏窪めといふに同じ。太玉串(天次) 太は稱辭なり。玉串は、手向申にて、マケの約めなるをマに轉していふなりといへり。また木綿を着けたる脚をいふは、後の事にて、神代に、玉を着けて献りしよりいひ來れる稱にて、字の如く、玉串なりともいへり。

太玉串

(天次) 太は稱辭なり。玉串は、手向申にて、マケの約めなるをマに轉していふなりといへり。また木綿を着けたる脚をいふは、後の事にて、神代に、玉を着けて献りしよりいひ來れる稱にて、字の如く、玉串なりともいへり。

船乗爲

(使) 船に乗りてといふべきを、かくいふは古言の例なり。

船滿都々氣

(年) 滿を、ミチと訓めるは、わろし。ミチと訓までは、語脈たがふなり。

太兆乃卜事

(中) 太は稱辭なり。マニは、兆にあらはれたる形をいふ。卜事は、卜止母の下に註せるを見るべし。

く火をいふとぞ。

よ

麻知波

(中) 麻知は、太トのマチをいふ。そは、吉凶の兆なれば、やがて、シルシといふことを古くは、麻知ともいひしなるべし。然れば、此は、兆波と聞くべきなり。

坐

(使) マセは、令坐の約なり。

麻奈弟子

(火) 麻奈は愛なり。卿(春) 前津君なり。天皇の御前に侍る君といふ義なり。マは清みて讀むべし。

罷出

(禮) 貴きより、賤きへ往くを、マカルといひ、賤きより、貴きへ往くを、マキルといふ。

參集

(風) 參り候ふなり。集侍の下に註せり。盡物爲罪 (禮) 兇ひ詛ふ事をする罪なり。マナナも、此れより出でたる言なり。

申進留 (音) これはマラシマツルと訓むべし。然らでは天津祝詞を進つると聞えて、

いかにぞやあり祝詞は神に願ぐ詞なり。後世詩歌を献る類にはあらぬをや。

麻蘇比乃大御鏡 (田) 麻蘇比は直澄なり。清く曇なき鏡なり。

護惠比幸給 (天次) 比は美と通へり。またノグマヒとも訓むべし。續紀の詔詞に、まかよめり。マヒの約めミなり。

み

御酒 (卷) 酒の本名はクシなり。そを約めて、キといふなり。

美保止 (火) 御火所なり。陰なり。

御調 (卷) 續の義なり。献る物の、續きて絶えぬより出でたる言なり。

見直志 (殿) 見宥むるなり。

宮進米 (殿) 宮仕の職業を懈らしめずの意にていへる言なり。

宮勤 (殿) 勤は夙をはたらかしたる言なり。夙に物するが即ち勤むるなり。朝の字も、ツトとよめり。ツトは初時の上下を省きたる言なりといへり。

御膳都水 (中) 御膳に用ふる水をいふ。都は天津などの津にての同じ。

御膳持須 (廣) モツスは、モツを延べたる崇め辞なり。まろしめすとの心なり。

見所行須 (火) 見給ふなり。ツはシにて、見し給ふなどいふ見しなり。ナハスは、活用のためにそへていふ辞なり。

見霽 (泉) 見晴らすなり。

御霧 (秘) 御は異なり。

御横刀 (卷) ハカシは佩を延べたる崇め辞なり。さて刀は佩き給ふ物なる故に、かへいへり。即ち、刀の事になるなり。弓を、ミトラシといふも、御手に取り給ふ物なる故に、即ち、弓の事になるも、同じ事なり。

御弓 (卷) 御横刀の下にいへり。

御刀代 (廣) 御年代にて、神の稻を作る田をいふ。年は稻なり。

幣帛 (年) 充座の義。万の物を置座に置充て献るより出でたる言なり。またいふ。古は、神に献る物を、クラといへり。さて、御手に執り給ふ故に、御手クラの義なりともいへり。

耳無 (年) 大和國十市郡の地名なり。神社の坐す故にやがて、神の名に申しなせるなり。

溝埋 (秘) 田に入るべき水を、かくして、引か

御杖代 (卷) 杖は體を助くる物なれば、其の杖の代りとの意にて、即ち、御身に、親しく仕へ奉る稱としたるなるべし。姓氏錄に、山猪子、連等、仕奉、上宮皇太子、御杖代、とも見えたるをもて知るべし。

御袁知坐 (田) 袁知は、初めに返るをいふ。此所は、御若返坐の心なり。

御若叡坐 (田) 御若く成坐なり。

瑞穂之國 (殿) 瑞は稱、穂は、稻の穂也。

瑞八尺瓊 (殿) 瑞は稱、八尺は、彌、眞明を約めたる言なりといふ。

瑞之御殿 (殿) 瑞は稱、御有所の義也。

御阿加良毗坐 (田) 御面の赤らび坐すをいふ。赤くなり給ふをいふ。

見阿波多志給 (火) 見わらはすなり。願霧にするをいふなり。

見明物(見) 見しは見給ひといふに同じ。

御禱乃神寶(出) 禱は祝なり。

見食倍尊食倍(中) 食倍は給へなり。

御門能御巫(年) 御門の祭に仕へ奉る御巫なり。

宮柱太知立(年) 太は稱辭知は領しめす義なり。被には太敷(春)には廣知(平)には廣敷ともいへり。

水江玉乃行相爾(出) 瑞之美玉なり。行相とは緒に貫きたる玉と玉との相並び

著きたる所をいふとぞ。

水分坐皇神等(年) 大和國の吉野の水分峯に坐す神なり。分をクマリと訓ひは配の古言なり。バとマと通せり。

御年初將賜登爲而(年) 年ハ稻なり。初は殖る初めといふ意なり。一本祈の字

む

平氣(果) 平の字は義を以て書けるにて、此方へ令向なり。扱は背向なる、その反にて、服はしむるなり。従はしむるなり。

向股爾泥畫寄(年) 畫は描なり。

も

持由麻波利(年) 由は齋なり。麻波利はミを延べたるなり。齋みなり。

物忌等(六次) 御儀に仕へ奉り、物事に齋戒する故の稱なり。禰宜内人物忌などいへり。童男女なり。

持淨麻波利(殿) 麻波利はミを延べたるにて淨みなり。

物部乃人等(中) 部は群の約言轉音に

を作けるに據らば、コヒと訓むべきなり。是れ宜きに似たり。

御横刀廣爾誅堅米(出) 御横刀は四言の下に註せり。廣は刀縁なければ誤りなるべし。誅堅は御世を打ち堅めなりとぞ。

御衣波上下備奉(魂) 上は衣をいひ、下は袴をいふ。

御吹伎乃五百都御統乃玉(殿) 御吹伎は御祝なり。御統は字の如く、糸もて貫き統べたる、多くの玉なり。

應閉高知應腹滿雙(年) 應は後世、モトヒといふ物なり。閉は上なり。高は應の丈け高きをいふ。腹は内なり。

耳振立聞物止馬率立立(被) 耳振立は、聞く状なり。馬は、聴く物なる故に、被物にも出せば、かくいふなり。

て、其の部をいふ言なり。されば、物部とは、廣く渉る言なれど、此所にては、酒造兒云々の人をさす事儀式にも見えたり。

百能物知人等(風) 百は物知人の數なり。多くの事を知れる人といふ説は、わろし。

や

山邊(年) 大和國の郡の名なり。神社の坐すによりて、やがて、神名に申しなせるなり。

八鹽道(被) 彌潮道なり。潮のさしひきする道にて、數所あり。急流瀧の如き所もありとぞ。鹽乃八百道といふも、其の潮道の多きをいふなり。

八十綱(年) 多くの綱をいふ。八は彌なり。

八束穗(年) 八は彌なり。束は、四の指をならべたる長さをいふ。長き穗をいふなり。

被燒^{ヒヤク} 火^ヒ ヤカレをヤカエといふは古

言なり。すべて古言は被のレをばエといひ

八咫鏡^{ヤスヒノカミ} (出) 咫は八寸をいふといへり。平

田翁の度制考に説あり考ふべし。

八十件男^{ヤソウケンヲ} (被) 多くの部の長なり。

安幣帛^{ヤスヒノヒ} (春) 安はやすらかにうけ給ふべ

八針^{ヤスヒノヒ} 爾取辟^ニ (被) 八は彌にて針もて幾

筋にも割くをいふ。

燒鎌^{ヤスヒノヒ} 乃敏鎌^ニ (被) 燒とは燒きて刃をな

す故にいふ敏は利きなり。

八百丹杵^{ヤソウノシ} 築宮^ニ (出) 丹は土にて多く

の土を杵して築きと云ひかけし枕詞なり。

八十日^{ヤソウノヒ} 波在止毛^ニ (出) 八十日日は

多くの日なり。かは三日四日のカにて來經

の約めケの轉音なり。

八桑枝^{ヤソウノエ} 乃立榮^ニ (中) 彌木榮にて多くの

木の榮えたる如く立榮といふ意なり。

山口坐皇神等^{ヤマノコノミカミノカミ} (年) 下に見えたる六

つの山の口に坐すなり。

ウ

悠紀^{ユキ} (中) 大嘗會に仕へ奉る國をいふ主基

の下に註せるを見るべし。

由庭^{ユノニ} (中) 由は齋にて淨めたる場なり。

湯都磐村^{ユノツツノイハ} (年) 湯都は彌津の轉音にて

多きなり。村は群の借字なり。

夕日之降^{ユフノヒノフ} (被) クマリは古言にてクマ

チともいふ夕なり。

由志理伊都志理^{ユシリイツシリ} (中) 由は齋伊都は

嚴にて共に清淨の義なり。志理は其の狀を

く見ゆる事などのあるをいふなり。

與美津枚坂^{ユミツノヒ} (火) 美は毛と通へば與毛

津云々ともいへり。枚坂は黄泉と顯國との

界なり。枚は平にて平易なる義なり。

如横山^{ユコノヤマ} (春) 山は連りて長く見ゆる故に

打ちまかせて横山といひ習へり。

四國卜部等^{ヨロイノウラベノカミ} (被) 伊豆壹岐對馬と京と

の卜部をいふなり。

歡食倍聞食倍^{ウツクシノツクシ} (中) 食給は給への約め

なり。常にいふ事なり。

わ

弱蒜^{ユカヒ} 爾^ニ (中) 若蒜なり。爾は如くにといふ

意なり。常磐爾堅磐爾の爾のごとし。

若水沼間^{ワカミノヌマ} (出) 若は稱辭ミヌマは水沼

なりといへり。また此の文には誤字も多

いふ辭にて俗言に突くをツクサリ叩くを

ツ、ツリともいふ類なり。

靱負件男^ニ (被) 靱は箭を盛る物なり。こ

れを負ひ持つは後世六術府の類の武官也。

由都五百篁^{ユツツノヒ} (中) 由都は嚴なり。都濁る

べし。五百は多くのなり。

夕日乃日隱處^{ユフノヒノカクレ} (風) 日隱處は註せり。

よ

吉野^{ヨシノ} (年) 大和國の地名なり。神社の坐す故

にやがて神の名にまをしなせるなり。

壽詞^{ユキ} (中) 吉詞なり。吉き事を申す詞なり。

弱肩^{ユカヒ} (年) 今も弱腰ともいふに同じく肩は

折れ屈む所にて弱く見ゆる故にいふ。

夜女能伊須々伎^{ヨメノイヌ} (被) 夜目なり。伊須

々伎は驚き懼れ懼く狀なり。夜は物の怪し

あるよしにて若栗栖なりともいへり。いづれかよろしからん。栗栖は栗の刺ある殻なり。されど打ちまかせて栗をたゞ栗栖ともいひならへり。

ぬ

禮自^レ利^ル 禮自利の利を省けるなり。

禮自^レ利^ル (世) 禮代にて献る物をいふ禮代

乃幣^ナ乃御巫^ノ (年) 井之後の義なり。座摩

座摩乃御巫 (年) 井之後の義なり。座摩

は借字なり。

を

彼方^カ (世) 後世はアチといふ。

麻笥^マ (風) ケは器物の總名なり。もとは麻を

織み入るる器の名なり。

男女^ナ (廣) フトコは少男をいふ。此所は、ヲノ

コト訓むべきなり。

稱^カ 唯^レ (年) フは答ふる聲なり。

遠止^ト 美乃水^ノ (世) 淀みの水なり。

教悟^カ 給^ル 比^レ 那^ノ 我^ガ 良^シ (使) 教へ悟し給ひ

しまゝにといふ意なり。神隨のナガラに同

じ。

祝詞切幣終

明治三十二年十一月一日印刷

明治三十二年十一月十日發行

著者 故人 物集 高世

東京市本郷區東片町百拾六番地

相原 續著 人者 物集 高見

東京市神田區西小川町一丁目十一番地

發行者 渡邊 兵吉

東京市神田區西小川町一番地

印刷者 多田 榮次

東京市神田區西小川町一番地

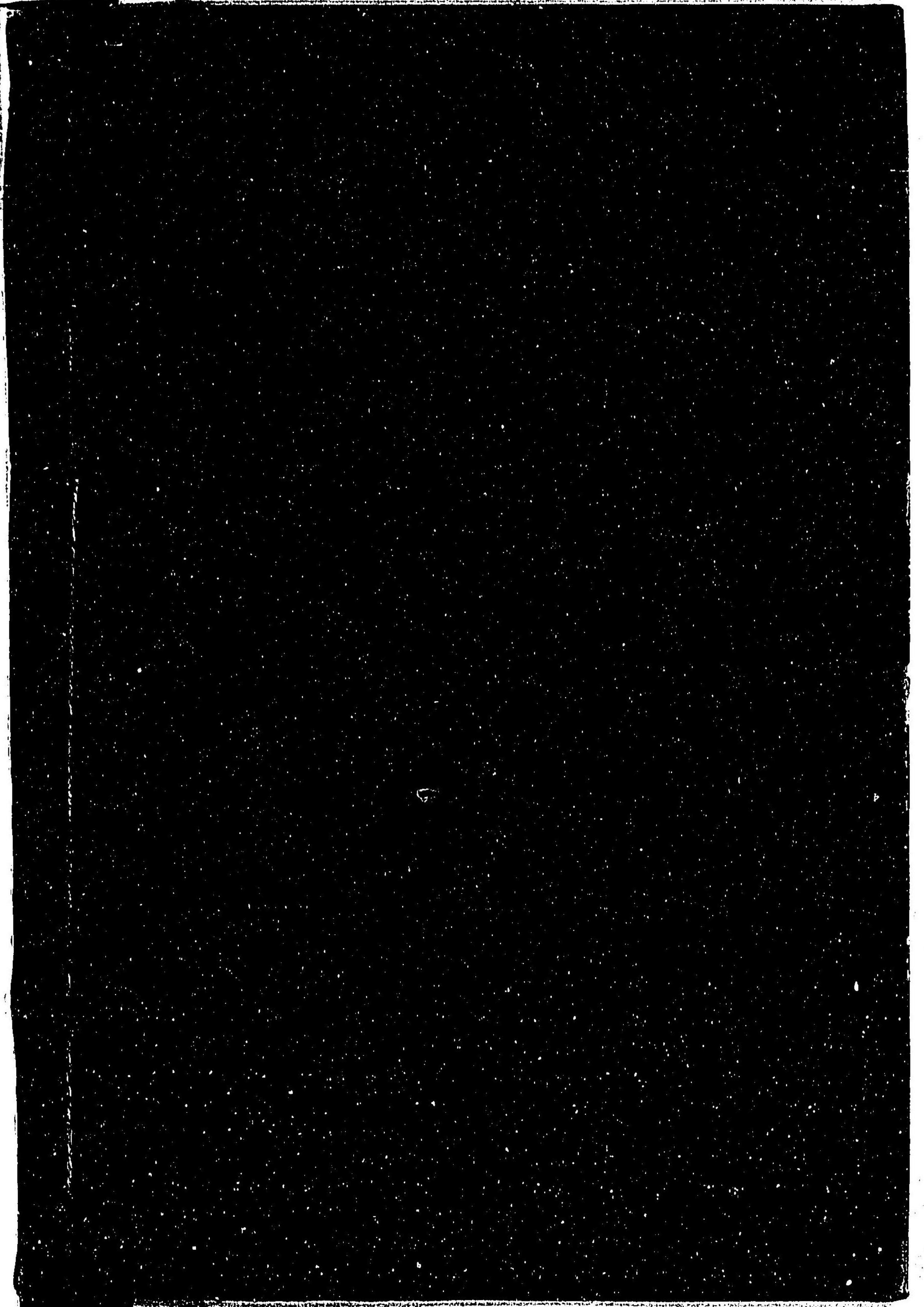
印刷所 愛善 社

東京市神田區西小川町一丁目十一番地

發行所 六合館

187
76

1877
76



014523-000-9

187-76

祝詞切麻

物集 高世/編

M32

ABB-0905

